

インスパイアされた映画観

日野笙子

インスパイア、この表題は決してオーバーじゃなかったつもり。時は一九七八年。神田神保町の岩波ホールではじめて観た「ピロスマニ」（ゲオルギー・シエンゲラーヤ監督）は、グルジアの放浪画家の伝記映画だった。こう言えばたいいていの人はわかるだろう。ああ、あの歌の主人公か、と。ニノ・ピロスマニ（一八六二―一九一八）は「百万本のバラ」の「貧しい絵描き」なのだ。岩波ホールは今や誰しも知る「エキブ・ド・シネマ」。埋もれた名画を紹介するミニシアター先駆けの劇場だ。今年に入って二月、創立四十五周年の節目に総支配人の高野悦子さんが亡くなられた。

同時代のいつときを、どれほど上質な名作で感動させてもらったことだろう。上映スタイルはずっと同じだ。有り難くなくて、何だろう。神保町の交差点のあの大きな看板が、まるで当時の時代への道しるべのように感じられる。しみじみ、懐かしい。

あの頃、私は一目で「ピロスマニ」に惚れ込んだ。恋に落ちるように。何もかも放り投げて浮浪者になりたかった。この時ほど本気で男性に生まれたかったことはない。どう言ったらいいのだろう。男性だと羞恥心というものが女性より少なくてすむ。たぶんそうだと思ったのだ。不遜だった。既にジャパニーズ・カローシという言葉が登場していた。

八十年代に入った頃だった。別々の場所だったと記憶しているが高野悦子さんと字幕翻訳家の戸田奈津子さん、この二人の講演を聴いた。スーパーウーマンあらわる、という感じだった。無類の映画好きの女性が、道なき道を歩まれたのだ。二人ともに、すがすがしかった。私の眼には、飾りのない大人の女性として魅力的に映った。当時の私はひどく無気力だった。モラトリアムの成れの果てに感じた。本来やるべきことに対してことごとく意欲がなく、殆どアパシー状態と言ってよかった。当たり前のことだが、アパシーだろうがモラトリアムだろうが暮らしていかなければならない。そのためになぜだか映画館へ行くことが必要だったのだ。そしてそういう状態でインスパイアされた記憶は、たぶん人の一生の記憶の座標軸の定点みたいに揺るぎないんだと思う。

その時の高野悦子さんがこう言ったのを覚えている。まるで一人一人の聴衆に約束するように。

「どんなにストーリー的によくできていても、暴力や戦争を肯定する作品は決して上映させない」

高野悦子さんの作品の選び方は明快だった。

ついでに言ってしまうと、その頃、東京の街頭で、こんなシュプレヒコールが聞こえていた。「大型間接税ゆるすなあ！」（今の消費税）「沖縄から米軍基地はでていけえ！」

何故だか耳に残っている。カルチャーショックにすぎないと言えば、そうなのだ。なんせ、北海道から出てきたのである。たとえば、島国につぼん、開国前の村娘が発見したときのよなショックだ。別段、「見栄張る年齢でもありません」（これは芥川賞を受賞された黒田夏子さんの台詞）。とにかく靈感を受けるほどの衝撃だった。曲折多い人生だったが、以後私は映画とそれにまつわる何かを追いかけることになる。

振り返ると、「ピロスマニ」はそれほど当時、話題に上っていなかった。と言うより、すぐに、「家族の肖像」（ルキノ・ヴィスコンティ監督）とかフランソワ・トリュフォーの作品とか、巨匠と言われる監督の作品がヒットしていたような気がする。だからピロスマニは映画も主人公も私にとって孤高を貫いたのだ。

あの頃はこの劇場に通うことを楽しみとした。「木靴の樹」や「旅芸人の記録」はとても長い映画だったが、ちゃんと最後まで眠らずに観た。アンジェイ・ワイダ監督「大理石の男」、イングマル・ベルイマン監督「秋のソナタ」、いずれも心に残った。

暮らしは現実との格闘であった。神保町の大きな交差点で、岩波ホールのある大きな看板を見るとほっとした。いわば目の前のにんじんだったのだ。チケット代は決して安くはなかった。食事は殆どアルバイト先で済ませた。若いということはほんとにいいもんだ。夢ばかり見ていれば多少の辛いことは思い出さなくてすむ。

二〇〇九年頃、ある日テレビを見てみると、確か日曜日だったが、画面に、あれえ、ピロスマニがいるという感じで彼が映っていた。青春期に憧れた画家である。それは、ひょっこり登場した私の記憶の定点、という感じの番組だった。「百万本のバラ」に歌われた「女優マルガリータ」や「動物」「牛乳しぼり」など、そのモチーフは映画に登場していたものと同じで、清冽だった。ブルジョアの民衆の生活やその風土が次々と発掘されるように映し出された。

こういうジャンルをナイーブ・アートとかプリミティヴな画風、と言うのだそうだ。このあたりは美術家の本の方がもちろん詳しいだろう。放浪の画家の本を探せば、必ずその代表格としてピロスマニは登場する。現在、「ピロスマニ」は優れた名作として、美術品と共に世界中で取り

上げられるようになった。

最近観た映画で似たような感動を覚えたのが「セルフイーヌの庭」。これも、フランスの女流、素朴画家のバイオグラフィード。やはりピロスマニのように孤独と自閉の中で、独自のプリミティブな絵を描き続ける。日本で言えば、山下清がこのタイプらしい。「裸の大將放浪記」がある。こちらも味わい深い。おにぎりを頬張る俳優、芦屋雁之助が本当においしそうに食べる。「野に咲く花のように」がテーマソングだ。西欧の「百万本のバラ」と趣はだいぶ違うが、辛いときにハミングするといひ歌だ。私などいつも口ずさんでいる。

映画の中で主人公は通称ニコラと呼ばれ、全編通じて殆ど喋らなかつた。第一次大戦とロシア革命までの激動の時代が背景だ。グルジアは旧ソ連の独立国。音楽や衣装などグルジア独自の民族性が色濃く出ていた。ゆつたりとした時の流れで絵画や自然を堪能できるのだ。大国の支配のもと、この民族を映す映像は、大地に根付く民衆のひたむきなドラマを感じさせる。思えばユーラシアの大地はなんと傑出した芸術を生み出してきたことだろう。島国につぼん、村びとである小娘がびつくりしたわけである。

「ピロスマニ」のラストシーンがまた忘れられない。祭りの日に彼は衰弱死する。暗い納屋で横たわるピロスマニに知り合いの民衆の一人が「何をしているの？」と尋ねる。彼は言う。「これから死に行くのだ」と。こうして無欲とイノセンスの象徴ニノ・ピロスマニは私の永遠の憧れの人となった。

彼をオマージュしたような最期のセリフを書いてみたいものだ。きっと私は好きな酒を最後まで放さないだろう。未練たつぷりに。想像しただけで飲み足りないような気がしてくる。たぶんおにぎりではない。所詮、彼のようなイノセンスを私は持ち合わせてはいないのだ。

ピロスマニが夢に見たのは大きな木の下に、みんなが集い、お茶を飲み、夢を語る、という素朴なものだった。そうなのだ。みんなが夢を見られるように、独自の上映スタイルにこだわりつづけた岩波ホールは、すでにその大きな木にも似ていないか。はじめは女性でありながら監督を夢に見て、今度は映画人の夢を育てる人生を貫いた高野悦子さんだった。常に弱い者に対する配慮を忘れずに、優しいままなざしで人間の尊厳を映し出した。遠い昔に、いつまでも残る、インスピアされた映画の記憶として。それが私の若い時代、自分なりのプロテストだったような気がしてくる。岩波ホール最盛期、その同時代に青春期を過ごし、たくさんの夢を見させてもらった者として、高野悦子さんのご冥福を心よりお祈りしたい。

